

「喰い者」

—初稿—

2024/12/3

脚本 太郎

〈人物表〉

木原春人 (14) 中学二年生。

淀川文夏 (14) 中学二年生。いじめられっ子。

綾部隆 (14) 中学二年生。いじめっ子。

〈ログライン〉

優柔不断で自分がない木原が、子犬が死にかけている現場に出くわし、他人の顔を窺いつつ最適な対応をしようと試みるも、淀川にその愚かさを見抜かれて啜われてしまう。

〈ねらい〉

・優柔不断な主人公を書く。

1. 中学校・教室（昼）

一般的な広きの教室。

窓の外では雨が降っている。

木原春人（14）、教室の後ろの隅の席で 文庫本を
読んでいる。

綾部隆（14）、男子A（14）、男子B（14）た
ちがポロポロの筆箱でキャッチボールしている。

彼らの馬鹿笑いが時折聞こえる。

男子A 「パスパス！」

木原の頭に飛んできた筆箱が当たる。

木原 「え、え？ えーと……」

狼狽しながら、キョロキョロと教室を見回す。

淀川文夏（14）、ぼんやりと木原を見ている。

男子B 「お前淀川菌ついたからなあ！ ギャはは」

木原 「ええ……」

木原、困りきった様子。

淀川の面倒くさそうな顔。

彼女の机は落書きだらけ。

綾部、面白くなさそうに、

綾部 「お前最近無反応でつまんねーんだよ」

淀川の後頭部を教科書で殴る。

淀川、小さく悲鳴をあげて後頭部を押さえる。

木原、筆箱を両手で持ったまま気まずそうに硬直し
ている。

綾部、木原を見て、筆箱を指さす。

綾部 「いつまで持ってたんだよ」

木原 「え、ああ……」

木原、自分の席から立って淀川の席へ向かう。

綾部は大きな手ぶりでおどけたように、

綾部 「いやいやいやノリ悪いってー」

木原、慌てて立ち止まる。

木原 「えー……」

綾部、ニヤニヤした表情で少し考えた後、思いつい
たように、

綾部 「(窓を指さして)木原、お前それ窓から捨てちゃえよ。そしたらこいつ泣くかも」

木原、逡巡して、

木原 「いや、さすがにそれは」

数秒の沈黙。

男子たち三人の目が冷たくなる。

綾部 「……何お前、こいつ好きなの？」

木原 「いや、そうじゃないけど」

綾部、意地悪そうに笑うと振り返って、

綾部 「なんかコイツらお似合いじゃねー?」

どっ、と男子たち三人が馬鹿笑いして、それがゆっくり教室全体に広がる。

木原の顔が引き攣っていく。

男子A 「付き合えば?」

男子B 「結婚すれば?」

綾部 「性犯罪者の遺伝子残してどうすんだよ」

どっ、と教室全体で馬鹿笑いが起きる。

木原、泣きそうな顔で筆箱を持ったまま立ち尽くしている。

綾部 「良いよ良いよ、いちゃつけよ」

綾部、無理やり淀川を立たせて前に押す。

淀川、短い悲鳴を上げる。

木原、淀川を受け止めて倒れる。

筆箱が床に落ちる。

男子A 「キスしちやえ、キス」

木原 「えっ、いや……」

木原、焦った様子で男子たち三人を振り返る。

綾部 「選べよ。汚物とキスするか、汚物の筆箱捨てるか」

苦悶する様子の木原。

面倒くさそうな表情の淀川。

『キース、キース』とはやし立てる男子たち三人。やがてちらほら、他の生徒たちの声もはやしに混じる。

木原の表情がどんどん切迫したものになっていく。

木原、ゆっくりと自分の顔を淀川へ近付けていく。
淀川、嫌悪の表情。

木原、驚いて動きを止める。

次いで困惑の表情になる。

男子B「うわ、こいつガチでやるつもりじゃん」

木原、ぎよっとして飛びのく。

男子たち三人は引きぎみの様子。

綾部「きつしよ。ないわー。性犯罪者の娘とキスとか。もはや

お前が性犯罪者じゃん」

木原、男子たち三人を伺うように見ている。

綾部、優しそうに苦笑する。

綾部「空気くらい読めって」

木原、観念した様子で淀川から離れ、筆箱を拾う。

窓に近付き、大きく振りかぶって筆箱を投げる。

雨の中、放物線を描いて、筆箱が校庭に落ちていく。

ポチャンと水溜りに落ちた音と、何かが壊れた音。

男子たち三人の馬鹿笑いが響く。笑いが教室中に広

がっていく。

チャイムの音。

2. 路上(夕)

片側一車線だが、やや道幅が広めの道路。

雨は止んでいるが、ところどころに水溜りがある。

車の通行量が多いが、人通りは少ない。

木原が学生鞆を肩に掛け、路肩をトボトボと歩いて

いる。

前方に淀川が立っていて、明後日の方向をじっと見

ている。

木原、淀川に気付くと僅かに逡巡する。

やがて小走りで彼女に近付いていく。

木原「淀川」

淀川「ああ木原くん」

淀川、一瞬だけ木原を見ると、またすぐ明後日の方
向に視線を戻す。

木原 「(やや溜めて)あの、さっきはごめん」

淀川 「あー……うんまあ」

木原 「今度弁償するからさ」

淀川 「え？」

木原 「その、あれいくらくらいかな？ 筆箱と……あと何かあの、中のペンとか」

淀川 「えっと……いや、別に良いよ」

木原 「え？ いや良くはないだろ。……(顔色を窺うように)ごめんって」

淀川 「は？ ……ああ、いや別にそういうんじゃない。よく考えたら今そんな使ってないし」

木原 「？ 板書するだろ」

淀川 「最近あんましてないかも」

木原 「そうなの？ でもお前成績良いんじゃないかったっけ」

淀川 「(軽く溜息を吐いて)なんかもう色々どうでも良いし」

木原 「……えーっと」

と返事に困る。

淀川、興味なさそうに木原に視線を向ける。

淀川 「てかそれよりさ、邪魔だからどいてくれる？」

淀川、木原の肩に触れて立ち位置をずらす。

木原 「え、何？」

淀川 「微妙に見にくい(言ったあとすぐ視線を元に戻す)」

木原、淀川の視線を追う。

道路の真ん中に腹部から血を流した瀕死の小型犬が倒れている。

木原 「うわっ、え何あれ」

淀川 「何って犬でしょ」

木原 「いやそれは分かるけど……ヤバいだろうあれ」

淀川 「(嬉しそうに微笑んで)ヤバイよねえ」

木原、周りを見回す。

木原 「何だよ、誰も助けはないのかよ」

淀川 「まあそんなもんなんじゃない？ ……もしくは誰も気づいてないとか」

犬の身体に走行中の車のタイヤがかかる。

犬が小さく悲鳴を上げる。

呼応するように淀川が楽しげな笑い声をあげる。

木原 「て、てかお前も、何突っ立って見てんだよ?」

淀川 「別に。暇潰しですけど」

木原 「いやそういうことじゃなくて……良くないだろ。こんな
の」

淀川 「良いじゃん。面白いし」

木原 「面白いもんかよ。早く、助けないと」

淀川 「そう? 君つまんないね。まあ好きに」

木原 「……何なんだよお前」

淀川 「まあまあこっちの台詞だけど」

木原、悩まし気に唸ると、

木原 「いや、だって……助けるだろ、普通、誰かしら。そうす
るべきじゃ、ないのか? この状況」

淀川、訝し気に木原を見ている。

木原、辺りを見回す。他に人はいない。

継るように淀川を再び見る。

木原 「……え? あれ? 普通そうじゃないの?」

淀川 「何をわたしに伺ってんの?」

木原 「え?」

淀川 「何がしたいの? 言ってる間にぎっきと助けに行けばい
いじゃない」

木原 「いや、でも……車多くて危ないし……どうしたら……」

淀川 「馬鹿みたい」

木原、スマホを取り出す。

木原 「こういう場合、通報とかってして良いのかな……えと、
110と119、どっちに掛ければ良いんだろ……」

木原、スマホで検索し始める。

木原 「いや、ワンチャン保健所か?」

淀川 「そんなの調べてる間にどれかに電話すれば」

木原 「え? ……いやでも、違ってたら迷惑だろうし」

淀川 「迷惑う?」

木原を見て、少し驚いた様子で鼻で笑う

淀川 「命と迷惑で迷惑が勝つんだ?」

淀川、嘲笑の表情になる。

淀川 「君が恥ずかしいってだけでしょ」

木原、言葉に詰まる。

淀川、再び犬の方を向く。

期待の色にその目が染まる。

淀川 「おおっ」

木原 「うわっ」

大型トラックが犬を引き潰す。

血が撒き散らされる。

犬の首がちぎれ跳ぶ。血の軌跡が路面にできる。

淀川が歓声をあげる。

犬の生首の断面が傍らの標識に激突し、癒着する。

珍奇な光景を前に、淀川がゲラゲラ笑いだす。

木原、しばらく呆然としている。

やがて、木原も釣られたように笑いだす。狼狽した

表情で、乾いた静かな笑い声。

淀川、笑いながら、奇妙なものを見る目で木原を見

る。

犬の生首が赤い糸を引きながら、ちょうど木原の足

元に落下。大きな音が鳴る。

木原が悲鳴を上げて飛び退き、尻餅をつく。

淀川は一瞬静かになる。

やがて怯えた木原を見て、先程よりも大きな声で笑

いだす。馬鹿にしたように。

木原は恥ずかしそうに俯いている。

終